

抗生物質でぜんそく悪化 解明

善玉菌減り 腸でカビ 筑波大

抗生物質の服用で腸内のバランスが崩れて、ぜんそくが悪化する仕組みを、筑波大の渋谷彰教授（免疫学）らの研究チームがマウスの実験で突き止めた。真菌（カビ）の仲間「カンジダ」が腸内で異常に増えて、症状が悪化していた。抗真菌剤などで治療すれば、一部のぜんそく患者は症状を軽減できる可能性があるという。

研究チームは、複数の抗生物質をマウスに与えた。服用の仕方によっては腸内の乳酸菌などの善玉菌が大幅に減り、一方でカンジダが異常に増えた。カンジダは生理活性物質をつくる。この物質が血液によって肺に運ばれると免疫細胞が増えすぎて、ぜんそくの炎症を悪化させた。

研究チームは、ぜんそくが悪化したマウスに抗真菌剤などを注射し、カンジダを治療。ぜんそくの症状が軽快することも確認した。研究成果は15日付の米科学誌セル・ホスト&マイクロブ（電子版）に発表される。

（山本智之）